

非常に良好な状態で見つかった丸木舟

## ⑤ アイヌ丸木舟及び推進具



北海道に人類が住み始めたのは 2 万年数千年前といわれています。それから、さまざまな人の移動や移住、文化の移り変わりなどがあると考えられており、縄文時代に北海道に暮らしていた人たちが、そのままアイヌの人たちにつながる訳ではないことが指摘されています。しかし、一方では両者が共通する遺伝的な要素があることも確認されています。現在、アイヌの人たちの歴史は、人類学や考古学など様々な分野で研究が進められておりますが、苫小牧においても、その歴史の一端を垣間見ることができる発見がありました。

昭和 41 (1966) 年 7 月、旧勇払川河岸から、非常に良好な状態で丸木舟 5 艘と櫂、棹などの舟具類が発掘されまし

### アイヌ丸木舟及び推進具

北海道指定有形文化財 昭和 42 (1967) 年 6 月 22 日指定  
所在地：苫小牧市末広町 3 丁目 9-7 苫小牧市美術博物館内  
(※常設展内のため入館料が必要になります)  
所有者：苫小牧市  
管理者：苫小牧市教育委員会

た。丸木舟は 1 本の大木を半分に切ってくりぬき、鯉節形に整形した舟で、アイヌ語で“チブ”と呼ばれています。発掘された丸木舟は、河川用の“チブ”3 艘と、舟の左右のふちに波よけの板を張るために多数の小穴を開けた“イタオマチブ”と呼ばれる漁や航海に使用した板綴舟<sup>※3</sup>2 艘でした。一部の舟のふちには、アイヌ民族特有のアイウシ文の彫刻があり、櫂や棹には家紋や所有印が施されたものがあることから、アイヌ民族の所産であることがわかりました。これらの舟は、寛文 7 (1667) 年に樽前山が大噴火した際、大量の火山灰によって覆われ、地中に保存されたことから非常に良好な状態で見つかりました。製作年代については、火山灰に覆われていたため、約 330 年以前と推定されていましたが、化学的な測定により、約 770 年前という結果となり、現在では鎌倉時代末から室町時代初期 (1330 年代頃) のものと推定されています。

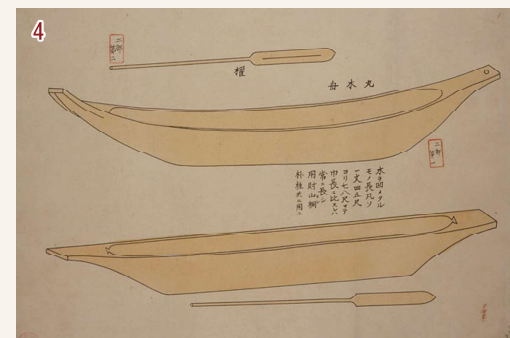
千歳市では、平成 4 (1992) 年、新千歳空港滑走路建設に伴う発掘調査から、江戸時代末期の蝦夷地探検家である松浦武二郎が記述している舟着場跡が発見され、そこからは大量の木製品と舟具が見つかりました。千歳の舟着場を拠点とする集落より板綴舟に乗り、美々川やウトナイ沼、勇払川を下り、太平洋で勇ましいシリカップ漁が行われていたと推測されています。旧勇払川右岸の丸木舟出土地は、まさにこの中継地として機能していたと考えられています。

これらのアイヌの丸木舟及び推進具は、貴重な資料として北海道指定の有形文化財となっており、苫小牧市美術博物館内に展示されています。

※1 櫂 (かい)  
船尾に支点を付けて滑りオールのようなもの

※2 棹 (さお)  
岸辺や水底につぼって舟を進ませる長い棒

※3 板綴舟 (いたつづりぶね)  
海用の舟で波を避けるため丸木舟の上に羽板を縦に綴じたアイヌ独特の技術を用いた舟



### 写真の解説

- 1 苫小牧市美術博物館内に展示されている丸木舟 (※常設展内にあるため入館料が必要になります)
- 2 丸木舟で川を下るアイヌの人々の写真 (北海道大学蔵)
- 3 「蝦夷風俗図」に掲載されたアイヌの人々の暮らし (北海道大学蔵)
- 4 「蝦夷風俗図」に掲載されている丸木舟の彩色画 (北海道大学蔵)
- 5 昭和 41 (1966) 年の発掘の様子 (苫小牧市美術博物館蔵)